

発表支援を目的としたダジャレ作成支援システムの提案

大谷紀子研究室

1372099 西野 瞭

1. 研究の背景・目的

学生から社会人になるにつれて、発表の機会が増える。効果的に自分の話を聞かせるには、聴衆の注意を引くことが求められる。松井 [1] は、ダジャレについて「絶えず人の注意を引くことを考えている広告の世界でのその有効性は高い」と述べている。発表中にダジャレをいうことで、同様の効果が期待される。しかし、ダジャレを考えることは難しく、作成に時間がかかる人も多いと考えられる。誰でも短時間にダジャレを作成できる手法が求められる。

田辺 [2] のダジャレ生成システムでは、文章中の言葉を同音異義語、類似音語に置き換えることで、ダジャレを作成する。例えば、「ジム」を「事務」に置き換えて、「見よ、事務で鍛えたこの体」というダジャレが作成される。しかし、田辺の手法では元の文章の意味が損なわれるため、発表中に使用するには不適切である。元の文章の意味を残したダジャレ作成手法が必要である。

本研究では、発表者がオリジナルのダジャレによって発表に対するモチベーションを高め、発表中の聴衆の集中力を維持できるようにすることを目的とする。ダジャレ作成支援システムを構築し、評価実験により提案手法の有用性を示す。

2. システム概要

本システムは、指定された入力タイプと方言モード、方言の地域設定に基づき、複数のルールに従って、入力された文章または単語に関するダジャレを作成する。入力タイプには、「文章」または「単語」を指定でき、指定されたものをダジャレ作成対象とする。指定された方言モードが「あり」のとき、入力文または単語を方言に変換したものに関するダジャレも作成する。ダジャレ作成ルールを以下に示す。

- ・似た音の名詞と動詞が同一文中にあり、名詞が動詞よりも前にあるとき、動詞を名詞に置き換える。
- ・入力された単語に音が似た副詞と、「忘れない、覚える」などの授業で使われそうな動詞を組み合わせる文章を作る。
- ・文中の名詞と一般的に用いられるオノマトペの音が似ているとき、オノマトペを文末に追加する。
- ・文中の名詞と一般的に用いられる語尾の音が似ているとき、語尾を文末に追加する。
- ・文中の単語の英語読みと別の単語の音が似ているとき、後者の類似部を前者に置き換える。

表示したダジャレの中で気に入ったものに加えて、受け身も選択できる。受け身とは、ダジャレ使用後スムーズに場を流すための言葉である。パワーポイントのデザインを選択すると、ダジャレと受け身が記載されたファイルをダウンロードできる。本システムで作成されたダジャレの例を表 1 に示す。

3. 評価実験

本学のアルゴリズム論の講義で、教員 1 名、受講生の男女 79 名、本研究室の学生の男 8 名を被験者として、評価実験を実施した。教員には、講義の前に講義資料の文章をシステムに入力させ、ダジャレ

表 1：ダジャレ作成例

入力	入力モード	方言モード	地域設定	作成されたダジャレ
さっき届いた脚立、もう片付けた	文章	なし		さっき届いた脚立、もう脚立けた
接待	キーワード	なし		接待、絶対忘れない
額、頼み忘れちゃった	文章	なし		額、頼み忘れちゃった ガクッ
アルコールは頼んである	文章	なし		アルコールは頼んでアル アルコール
リンゴのアップリケかわいいね	文章	なし		リンゴのアップリケか わいいね
リンゴのアップリケかわいいね	文章	あり	全国	リンゴのアップリケめ んこいね

を作成させた。講義を前半と後半に分け、間に教員に講義とは関係ない話をさせ、後半に、作成したダジャレのスライドを用いて、講義を行わせた。学生には講義を聴講させ、4人の学生の講義中の様子をビデオで撮影し、講義前半と後半の瞬きの回数を比較した。中野 [3]の研究より、講義中の瞬きの回数が少ないほど、集中しているとみなす。講義終了後、教員と学生に対して、ダジャレ使用と本システムについてのアンケート調査を行った。

瞬きの回数は時間ごとに増減し、ダジャレ使用時の方が不使用時と比べ、増減の周期が長かった。また、ダジャレを言った後に瞬きの回数が減少した学生は、4人中3人だった。教員は、作成されたダジャレに関して「好みでない」と回答したが、「普段の講義より、本システムの使用時の講義の方が、モチベーションが向上した」と回答した。学生は、講義中のダジャレ使用に関して、24%が「毎回授業で言ってほしい」、71%が「たまになら言ってもいい」、5%が「やめてほしい」と回答した。また、本システムの使用に関して、14%が「使用したい」、86%が「使用したくない」と回答した。使用したくない理由は、「恥ずかしいから」という意見が多数だった。

4. 考察

学生の瞬きの回数から、発表時のダジャレ使用は集中力の維持につながるということがわかり、ダジャレの有用性を示されたといえる。また、ダジャレを言った後に集中力の向上がみられるため、重要用語からダジャレを作成することで重要用語の理解につながると考えられる。教員へのアンケート調査から、本システム使用によるモチベーション向上が認められたため、本システムの有用性を示されたといえる。しかし、課題として、好みのダジャレが作成できなかった点が挙げられ、ダジャレの作成ルールを増やすことが求められる。学生へのアンケート調査から、講義中のダジャレ使用に対しては肯定的だが、自分では言いたくない人が多いことがわかったため、受け身のような、ダジャレ使用に対する心理的ハードルを下げる工夫が求められる。

参考文献

- [1] 松井信義，“英語の「広告」に関する考察：その言語ストラテジーを巡って，” 舞鶴工業高等専門学校紀要 42, pp. 76-83, 2007.
- [2] 田辺公一郎，“駄洒落のコンピュータによる処理：駄洒落生成システムの基本設計，” 産能大学紀要 26, pp. 65-74, 2005.
- [3] 中野珠実，“脳の情報処理とまばたきの関係を見る，” 生活誌ジャーナル 82号, 2014.